

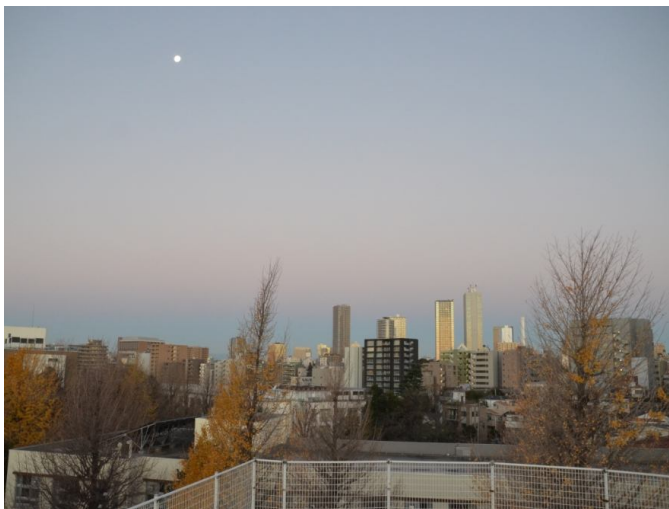
「日々の理科」(第 2724 号) 2021, 12, 29
「屋上のタンク塔から地球影を撮影する(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

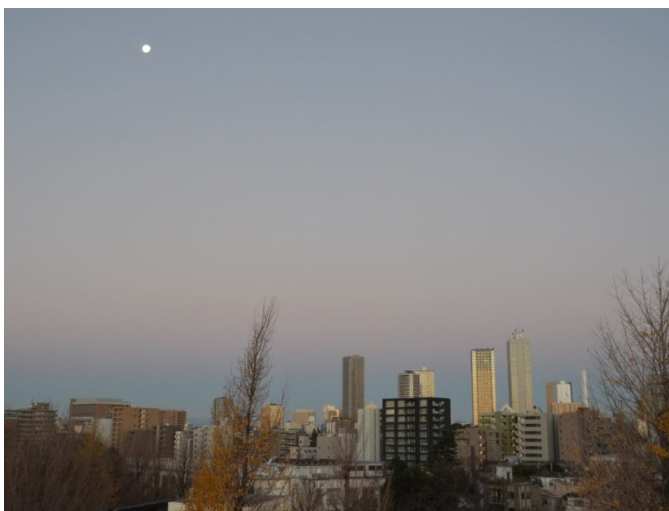
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

地球影撮影のために、屋上からタンク塔に、意を決してよじ登った。若い時は、スパイダーマンのように軽々と登れたのだが、今回は何度も失敗しながら、数分かけてやっと登れた。朝の地球影は、数分で色や姿が変わってしまうので、やや焦ってしまった。しかし、苦心して登ったかいがあったように思う。

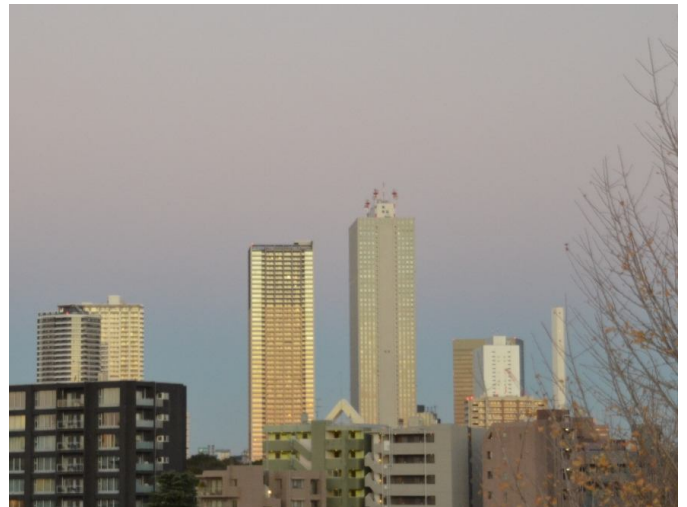


屋上床面からだど、フェンスやイチョウの木々が邪魔していたが、さすがに校舎一の高さで、天下をとった気分になる。観察対象の地球影もその全容を写すことができた。

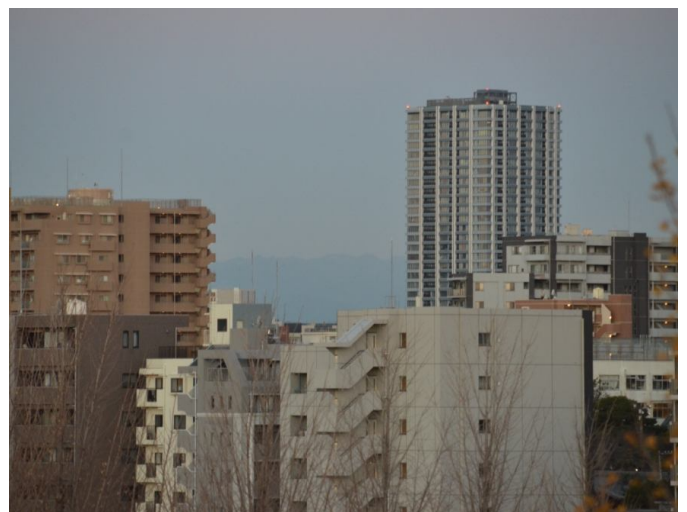


さきほどまでは「サンシャイン 60」の最上階付近まで「地球影」に覆われていたのが、私が「垂直はしご」と「格闘」している間に、ずいぶん下に降りてしまった。早朝の地球影は「西にある遠くの夜」を見ている

のと同じである。地球は西から東に向かって自転しているの。従って観測者から見て西側は、夜明けが遅い。その分、まだ「上空に夜が残っている」のである。それが、地球影の正体である。



朝の地球影は、少しずつ地平線に姿を消していく。これは遠く(西)の夜も、次第に明けていく様子を、はるか東(観測地)から見ていることになる。つまり「夜が沈んでいく」様子を観察していることになる。遠くの建造物・・・特に独立した高層ビルと比較すると、地球影が刻々と沈んでいく様子がよくわかる。



今回、タンク塔までよじ登って発見したことが、もう一つある。それは、ビルの隙間に遠くの山脈が見えたことだ。私が本校に赴任したのは昭和の終わり、もう 35 年も前になる。その頃は大学内にも、その周辺にも背の高い建物はなく、関東山地、丹沢山塊の山々、それに奥秩父の山々もよく見えた。晴れた日には、東京最高峰の雲取山、甲武信(こぶし)、それに富士山まで見え、よく子どもたちと観察したものだ。今は、屋上床面の高さからは、山は一つも見えない。しかし、タンク塔からは辛うじて見えたのだ。